

化学教育 徒然草

若手人材育成に向けて

MARUOKA Keiji

丸岡 啓二

京都大学大学院薬学研究科 特任教授,
2024 年度・2025 年度日本化学会 会長



「化学の甲子園」という言葉をご存知だろうか。日本化学会では、1998 年から国際的に通用する化学者を育成するため、「化学グランプリ」（通称、化学の甲子園）の活動を行っている。2024 年度は、全国 66 会場で一次選考（筆記試験）が行われ、2,694 名の中高生が参加した。さらに、成績上位の 71 名が秋田大学での二次選考（実技試験）に進み、大賞以下、金銀銅各賞を受賞した。一方、2023 年度の成績優秀者 4 名が、2024 年度の「国際化学オリンピック」（サウジアラビアで開催）に参加し、金賞、銀賞をそれぞれ 2 名が獲得した。このように日本化学会では、毎年、化学グランプリの実施や国際化学オリンピックへの生徒派遣を通じて、全国から才能ある中高生の発掘・育成に努めている。さらに、日本化学会の春季年会や秋の CSJ 化学フェスタでは、化学系の大学生や大学院生に研究発表の場を与えている。残念ながら、化学グランプリや国際化学オリンピックで発掘した才能ある高校生、いわゆる「金の卵」を、さらに研究主体の大学院でエリート育成する場がこれまで欠けていた。天然資源や食料に恵まれない日本が世界で生き残るには、人的資源の活用が極めて重要であり、特に大学や企業など、イノベティブな物を生み出す研究開発においては、若手のエリート人材の育成は、研究面での国際競争力に直結する。日本化学会はアカデミア、産業界におけるイノベーションや産業変革を先導できる人材、特に次世代を担う若手人材の育成、輩出の場を提供する必要がある。その有効な対策の一例として、2010 年から有機化学の分野で取り組んでいる若手育成道場としての「大津会議」（専門分野の研究や今後の研究提案の英語による発表などを行う）が挙げられる。全国の有機化学分野の学振特別研究員の中から毎年 16 名が選ばれている。すでに第 1～14 期の大津会議卒業生が約 230 名に達しており、そのうちの 70 % 近くが助教、講師や准教授として学界で活躍し、今では日本の有機化学界の一大勢力になっている。また、産業界においてもリーダー型研究者として活躍していると聞いている。今後は日本化学会を通して、このような活動をほかの化学分野にも広げることにより、才能ある若手研究者が国際競争力を身につけて、日本の産学界における存在感を示してほしいものである。

[連絡先]

606-8501 京都府京都市左京区吉田下阿達町 46-29（勤務先）